

6 岸田 劉生 《日比谷の木立》《初夏の小路》



我らの後の時代の、西洋の影響を受けた風景画というものを
見てみたいな。



この作品はいかがでしょう？岸田劉生さんの《日比谷の木立》はゴッホなどポスト印象派の影響を大きく受けていて、
絵具を混ぜずに直接塗った作品です。



遠く離れてから見るとそれぞれの色が混ざり、立体的で
鮮やかな風景になるな。これが点描技法というものか。



《初夏の小路》は、写実的な独自の画風を確立した頃のもので、療養していた鶺沼という地を描いた作品です。



まさに療養にぴったりな、穏やかで静かな雰囲気伝わって
くるのう。



でも描かれているのはただの道じゃないか。



時代が進むと、何の観光地でもない景色を描く作品が
誕生する。これが風景画なのだ。



名所絵とも真景図とも違う、近代的な風景画が出てくるの
ですね。



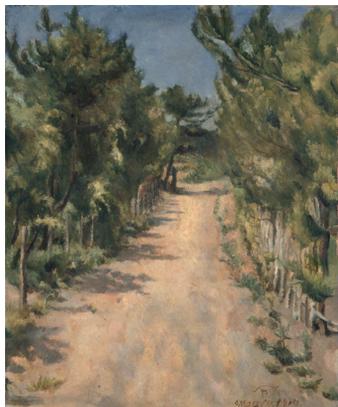
それにしても、これは同じ人間が描いたとは思えないほど
画風が違っておるな。



表現が多様になった近現代ならではの幅広さかもしれません。



岸田劉生《日比谷の木立》大正元年（1912）
下関市立美術館



岸田劉生《初夏の小路》大正六年（1917）
下関市立美術館